

新しいコミュニケーションの在り方を示す

ライフセンター共同体と 非暴力訓練セミナー

■制作部

「我々は、人間解放と非暴力社会変革を旨ざしているあらゆる世界のグループと関係を発展させていくことを望んでいる。我々は、文通、訪問者、社会変革をめざす学生、そして革命的な共同体を建設することに関心をもっている人々のすべてを歓迎する」

The Life Center / Movement for a New Society 1006s, 47th. St., Philadelphia, Pennsylvania 19143, U.S.A

我々はこれまで、数回にわたってアメリカ

これまでの多くの共同体に比較すると、ライフセンターはきわめてユニークな特徴を備えた共同体ということができよう。今はまだその成果を目的にすることはできないかもしれないが、自国アメリカだけではなく、海外での積極的な活動は、コミュニケーションとコミュニケーションを志向する人々とのあいだに、ことばのうただけではない新しい連帯を創り出していくことに役立つにちがいない。

ライフセンターは、現代の諸状況に反抗する二つのグループの主張に目をむけ、どちらをも批判するという形によってではなく、両方の主張こそ社会変革にとってなくてはならないものなのだという認識のうえに立つて、新しいコミュニケーションを建設した。

すなわち、ヒッピーに象徴される若者たちは、「国家は俺たちには関係がない」といい切ることによって社会との関係を断ち、都市を引き払い、自然のなかでコミュニケーションを建設して、そこで彼らの考えに従って生活した。

一方、社会変革を目的とする人々は、ドリップアウトすることがアメリカ社会を根本的に変革することにはなりえないと考え、国家への闘争をいどみ、その土台骨をゆさぶる直

コミュニケーションの紹介を行なってきた。こうしたアメリカコミュニケーション紹介の一環として、今月は、フィラデルフィアのライフセンター共同体について触れてみることにした。この共同体については、すでに先月号の本誌において、「非暴力社会変革をめざすライフセンターの活動」と題した論文を、ライフセンターのメンバーのクリストファー・モアが寄せてくれている。今月号の解説においても、この論文と重複するところが多くなるが、ここで重ねてライフセンターを取りあげることにしたのは、ライフセンターの基本的な考え方と彼らの目的、そして日本においてその派遣訓練員

接行動に訴えようとした。

ライフセンター共同体は、これらのどちらのグループとも、非暴力社会変革を達成するために必要な認識力を備えていると考えた。クリストファー・モアの文章を引用してみよう。

「この社会の秩序に挑戦するために、直接行動に立ち上がることは重要である。だがそれと同じように、この社会にとってかわる新しい生き方と制度を作りあげることも重要である。我々は、この両者がお互いに補強しあうものだと感じた」

こうして、非暴力による反戦活動を続けてきたクエーカーのグループは、社会変革を目的とした新しいスタイルの共同体を作りだしたわけだが、ライフセンターが以上のような認識のうえになつて出発したということはその論理の明快さと共に、我々にとって新鮮なことだった。

ライフセンターから派遣された二名の訓練員クリストファー・モアとチャック・エッサーは、二ヶ月間にわたって日本に滞在し、東京・奈良・広島各地において十数回に及ぶ「非暴力訓練セミナー」を組織した。そのセ

が行なつた「非暴力訓練セミナー」などが、コミュニケーションの新しい在り方を示すと同時に、非常に多くの有益なものを含んでいると感じさせられたからである。

まずなによりも最初に注目しておきたいことは、アメリカのコミュニケーションがひとつの目的をもって、彼らの考え方と行動とを紹介するために、海を越えて日本にきたということである。我々が得た資料によって判断する限り、少くともこれまでのアメリカのコミュニケーションは、コミュニケーションの連帯ということにあまり関心を示さず、自分たちの思想の拡大についても、むしろ消極的でさえあった。このような

セミナーの具体的な内容については後で触れるが、この「非暴力訓練セミナー」における彼らの姿勢と方法論には、我々にとって多くの学ぶべき点があった。

日本においても、社会変革を実現するために非暴力的な手段のみを用いて闘争を押し進めていこうとするグループと、現行法を越えて警察権力との直接の対立をめざすグループとのあいだには大きな溝があるし、長い論争が続いている。

しかしながらライフセンター共同体は、「暴力か非暴力か」という設定から問題を出発させるのではなく、徹底して非暴力によって何ができるのかを追求し、非暴力的方法による可能性をあらゆる角度から検討しようとしている。

武器を取って闘うことを主張するグループが、非暴力的な方法を批判するのは、主にその運動の効果の面からであるように思われる。彼らによると、議会を通して、あるいは非暴力的な直接行動を通しては社会変革を達成することはできない。そして、実力による闘争は、権力に対して衝撃を与え、国民全体に対して問題の所在をはっきりさせることができると主張する。

だが我々は、実際にクエーカー行動集団とライフセンターが取ってきた非暴力的手段による闘争の事例に目をむけることによって、彼らの運動が大きな効果を持つものであることを発見できるような気がする。非暴力によって何ができるのかを徹底して問い、その可能性をとことんまで追求していこうとする努力は、より人間的ではないだろうか。

そして同時に我々コミュニティを志向する者は、非暴力の論理を単に運動への効果の点のみから割り出された方法論のレベルにとどめておくのではなく、我々の生き方を支える基本的な思想として、学びつづけていかなければならないと思う。

2

ライフセンター共同体は、一九七一年の春に生まれた。ライフセンターの目的は、非暴力による社会変革をめざすことである。彼らは、他の多くのコミュニティの通例に反して、都市のなかにコミュニティを作った。現代社会の諸矛盾は都市においてより顕著にあらわれ、変革すべき主要な問題は都市のなかにこそあると考えたからである。

ライフセンターは、急進派クエーカー教徒



モア氏
クリストファー・モア氏
25才。ライフセンターの
「非暴力訓練セミナー」
訓練指導員として来日。

Q 日本では、全部あわせるとどれくらい訓練セミナーを組織したのか？

A 訓練セミナーには、いろいろのタイプのものであった。あるものは合宿を行ない三日から一週間にわたってぶつとおしで行なったし、他のセミナーでは、夜だけの時間を用いて行なったりした。東京をはじめとして、奈良、広島で主なセミナーは組織されたが、それらを全部あわせると十二ほどになると思う。

Q その十二のセミナーに、君ら二人とも全部参加したのか？

A いや、スケジュールの関係で二人そろって全部のセミナーに出るといふわけにはいかなかった。たとえば、ほくがあるセミナーの最終日を東京で行なっているとしたら、チャックは同じ朝、奈良でセミナーを開始するという具合だ。それから、彼が京都や大阪で雑誌の編集者と会ったりしていたときには、ほ

によるベトナム反戦活動の延長線上に生まれた共同体であるが、それは八つの小コミュニティの連合体であり、八つのコミュニティはそれぞれ自主的に管理され、原則的な問題に関してのみ全体の決定により行動するという形をとる。

彼らは共同体の収入を得るために、週に三日だけ外で労働する。彼らの目的は社会変革であり、生活に必要な最少限度の収入さえ得ればそれ以上働く必要はないと考える。つきこめる時間のすべてを、社会変革にむけて燃焼させなければならぬからである。

共同体の収入を等しく得ることは、メンバー全員に要求される義務だが、この他にも食事の準備をすること、清掃、子供の世話等の義務も平等に課せられ、男と女の仕事から生じる差別を克服することをめざしている。

この他、ライフセンターの試みは独創的で、生活のあらゆる面にわたっている。彼らは文房具店や印刷所を経営し、コミュニティ内に診療所を建て、地域の人々を含めた生産消費組合を作った。さらにこの地域独自の非暴力による警察隊を組織し、地域からの犯罪を排除しようとした。

そして、ライフセンターの目標である社会

くは横須賀でG Iむけの二日間のセミナーをやったり、というふうだった。だけど、大きなセミナーの大部分には二人で参加した。

Q あわせて、大体何人くらい日本人がセミナーに参加したのか？

A 約一五〇人だったと思う。

Q そのうちの大部分は、君たちと同じクエーカー教徒だったのか？

A いいや、大部分はクエーカーではなかった。全部あわせても、せいぜい十五人くらいがクエーカーだった程度だろう。日本のクエーカーは数も少ないし、それに社会変革ということにはあまり関心を持ってはいない。社会変革よりはむしろ、社会福祉的な奉仕をすることの方に、より多くの関心を持っているようだ。

Q ところで、その十二のセミナーを組織してみて、成功だったと思うか？

A 日本でのセミナーは、非常に成功したと思っている。我々は、日本でのセミナーを行なうにあたって、日本の文化や日本人の性格にあわせたコースを組むことに神経を使った。この点に関しては、チャックは早稲田大学で十八ヶ月ほど勉強したことがあるし、我々自身も日本文化についての幾分の理解はあった。

変革のためには、非暴力革命集団(NR G)および訓練グループの組織をもっている。ライフセンター内にはたくさんさんのNR Gグループがあって、この小グループは必要に応じてアメリカ各地で活動を行なう。

例えば、一九七一年にバングラデッシュでの戦争が没発したときには、合衆国の西バキスタンへの兵器の積出しを阻止するために、小さなボートによる海上封鎖を行なった。その後ベトナム向け武器輸出を防ぐために同様の戦術をとった他、最近になってからは、ジエネラル・エレクトロニクス(アメリカ最大の軍需産業)に対して軍需生産を終わらせるためのキャンペーンを行なっている。

一方訓練グループは、アメリカ国内ばかりでなく、オランダ、イギリス、アイルランド、ノルウェー、デンマーク等の国々において、非暴力社会変革のためのセミナーを組織してきた。来日した二人のメンバーは、このグループの一員である。

3

以下のインタビューでは、クリストファー・モア氏に、日本での「非暴力訓練セミナー」の印象を中心にして聞いてみた。

だがより重要なことは、これらのセミナーに延九人に及ぶ日本人がトレーナーとして参加したということだ。日本人のトレーナーこそが、日本人の性格に適したセミナーを組織し、この仕事をより完全に行なうことができるようになるだろう。彼らが、今回のセミナーを土台として、よりよい「非暴力訓練セミナー」を組織することができると思う。

セミナーの内容に関しては、まずいろいろな年齢の人々が、このセミナーに参加したことをあげてみたい。あるセミナーの中には、六〇才の人も混っていたし、学生もいた。こうして、年代のちがう人々がいっしょに集まって何かをする機会は、ふつう非常に少ないものだ。

又、直接行動のチャンスの人々に与えたことも、今回のセミナーの成果だったといえるだろう。あるセミナーでは銀座に出たりして、街頭でゲリラ劇場(大衆にむけて街頭に出て小演劇を行なうこと)を行なった。最初のうちはみんな恥かかしくて困っていたようだが、こうしたことはこれまで非暴力による直接行動を行なったことのない人々にとっては、非常によい経験になったと思う。

それから、我々がセミナーをひらくことに

よって、いろいろな種類の異なった思想を持ったグループが、いっしょに会う機会を作ったことも、このセミナーの成果のひとつに数えることができるだろう。若い人々のグループのなかには、S C I ワークキャンプ、F I W C、安保拒否百人委員会、ベ平連、自由連合、ヤング・リベラル、ぐるーぷ・もぐら、山岸会等があった。

Q 反戦運動のやり方では、比較的ベ平連がライフセンターに近いものを持っているように思うが。

A ばくもそう思う。ただ、ベ平連については十分な知識を持ってはいない。ベ平連については、いろいろな人々と話をしたけれども、ベ平連に属している人々とは十分に話をする機会がなかった。多分、我々にもっとも近いグループなのだろうが、ただ聞いた範囲から判断すると、ベ平連には、非暴力と暴力とのあいだで揺れ動いている部分があるのではないかと思う。ばくは、ベ平連の人々がこの点で必ずしも明確な認識に達しているとは思えない。

Q ライフセンターで活動している活動家を理解するという意味で、君自身がここで仕事を始めるまでに、どんな経歴をたどってきたのかを、かいつまんで聞かせてほしい。

A 高校時代から、ばくは学校における政治的な問題に関心を持ってはいたが、それほど積極的な活動家ではなかった。

アンティオーク・カレッジに入学してから、人種の平等をめざす学生委員会の活動に参加した。これは、S・カーマイケルのS N C C（非暴力調整委員会）と結びつきをもった委員会だった。この委員会で、ばくは黒人の人々とも共に活動した。それと同時に、貧しい家庭の子供たちに教えたりして最初の二年間をすごした。

その後、良心的兵役拒否をする決心をして、平和運動へ参加するようになり、大学においてデモや集会を組織した。

卒業後は、A F S C（アメリカ・フレンドサービス・コミッティ）で仕事を始めた。ここでは、テラウエア州で活動したが、それは社会的及び経済的な差別に反対するいろいろな種類の仕事を行なった。貧しい家で育った子供たちが、ちゃんとした家庭の子供たちと同じように学校で学べるようにするために、学校にあがるまえの子供たちを集めて教育する仕事も、ここで行なったのだった。

それから、最近の二年間は、フレンドズ平和

委員会で働いたが、ここでは平和のための教育を行なう仕事に従事していた。約一〇におよぶクエーカーの学校、それにカトリックや一般の公立学校で、平和のための教育を行なっていた。

ばくはこの間も、修士過程を終えるために勉強をつけていたが、修士論文のテーマとしたことは、いかにして社会変革を教育するかということだった。この研究を行なったことはばくにとつてすばらしい体験だった。

大学では非暴力による訓練を行ない、社会変革のための教育をし、デモを組織し逮捕されたこともあった。

そして、ライフセンターに住むようになったわけだが、最初のころはいくつかのコミュニケーションを回って、他のコミュニケーションで学んだ。

4

ライフセンターの二人の訓練員は、日本のプログラムを消化して帰国したが、その後を追うようにして、半年の予定でライフセンターでの生活体験をするために渡米した若者がいる。F I W C 関東で長いワークキャンプ活動の経験を持つ阿木幸男君である。

阿木君は、この「非暴力訓練セミナー」にも数回にわたって顔を連らね、日本でのセミナーにおける最も積極的な参加者の一人だった。今度は、このセミナーが、参加した人々によってどのように受けとられたのかを明らかにするために、彼にセミナーを通しての印象などについて語ってもらった。

何度かのセミナーに参加し、彼らとつき合ってみて一番印象深かったのは、彼らの生き方ですね。この社会をよくしていきたいという信念に基づいた彼らの姿勢には、さわやかですがすがしいものが感じられました。セミナーに参加した人々が引きつけられた最大の理由はここにあると思います。すこしいなあと感じました。

又、トレーナーとして、彼らは決しておしつけがましくありません。何かを教えに来たんだといった態度ではなく、自分たちはこれまでこうしてきたんだけど、そのことについていっしょに考えていこうとする謙虚な姿勢がありました。どんな人でも一生懸命に話し、みんなといっしょにやっつけていこうとする努力があらわれていました。

そのことは、セミナーにおける合宿生活に

おいても実によくあらわれていたという気がします。例えば合宿中の食事の当番のことや寝る場所についてなども、参加者と共に真剣に話し合ってますね。デリケートな部分にもよく気を使っていて、彼らの共同生活に対する考え方を理解できるような気がしました。

チャックは、生きることで自体がよるこびとなるような形で生きていきたいといっていたし、クリスも、自分はドラッグはしないけれども、生きがいを感じられることがあるから、薬を使う必要はないといっていたことが印象に残っています。

ライフセンターの試みは、日本において、ワークキャンプ運動も共同度も取り入れてよいものが多くあると思います。

非暴力ということにしても、それを単に暴力に対置するものとしてのみ考えるのではなく、もっと拡大して共同体における生活のなかへ生かしていこうとしています。観念のレベルで暴力と非暴力について論ずるのではなく、常に具体的な社会状況のなかでそれを考えていこうとしていること、これが大事なな点と感じましたね。

このように思想を実際の生活のなかで表現していこうという立場は、共同体における生

活をも真剣に考えさせていくものです。自分たちの殻にとじこもる共同体の多いなかで、彼らは共同体が常にひらかれたものであり、外に向かつて働きかけていくものでなければいけないと考えています。

× × ×

去る一〇月八日〜一〇日の三日間、山梨県金峰開拓のS C I 極東地域トレーニングセンターにおいて、日本人の手による初めての「非暴力訓練セミナー」が開催された。これは、ライフセンターからの二人のトレーナーを受け入れ、その世話をしたキリスト友会（東京都港区三田四一八一〜一九）の「非暴力についての懇親会」（代表石谷行氏）と、それまでセミナーに積極的に参加した人々がトレーナーとなつて行なったものである。

今後も、セミナーで学んだことを日本においてどう生かしていくのかを問いつづける努力が払われることになるだろうが、次に掲げるのは、この日本人の手によるセミナーに参加した山岡静代さん（第一〇回キブツ研修生）による報告である。

日本人トレーナーによる最初の

非暴力訓練セミナー報告

■レポーター／山岡静代

『月刊キブツ』10月号で既報された、フィラデルフィア・ライフセンターの活動の一環である、非暴力社会変革についての訓練セミナーが、8・9の2ヵ月、ライフセンターより来日した二人のトレーナーによって、東京・奈良・広島各地で開催された。

その時、トレーナーとしての訓練を受けた人たちの、日本人の手になる、はじめての非暴力セミナーが10月8日から10日の3日間、S C I 金峰トレーニングセンターで行なわれた。今回のセミナーの参加者は、トレーナーとして5名、セミナー受講者として参加した7名の計12名である。

はじめにトレーナーの一人である石谷行さんより、非暴力セミナーについて簡単な説明がなされる。

ブラジルの教育者パウロ・フレイリーは著

うち、機動隊は実力行使をはじめ、暴力でもって排除にかかる。それを見て、アジテーターは機動隊に投石をはじめ、やじ馬も加わる。機動隊はやじ馬にたいしても実力行使をはじめ、検査しようとさえる。そこで、非暴力直接行動の人たちは一緒に座り込むようやじ馬たちを引き入れ、共に機動隊の暴力に耐えつづける、で終了。

評価がなされ、やじ馬たちが最後に一緒になったのは非暴力直接行動を理解してのことではなく、たまたま自分たちも暴力を振われ、検査されそうになったため、身の保全のため結果的には非暴力直接行動の人たちと一緒にならざるをえなかったという外的状況によるものである。という意見が出、暴力が振りまわされているところで非暴力を通すことは無理なのではないだろうか。非暴力直接行動は暴力行為が起きる以前に働きかけるとき、有効なのではないだろうかと思見が出る。

戦略ゲームは一つの状況を設定し、敵対する当事者の役になって起こってくる問題について理論・戦略を練っていくものである。

設定された筋書は、米軍基地と自衛隊基地のある町で非暴力コミュニケーションが作られる。基地に続く道路沿いに商店街が並び、その裏に

書「抑圧された人々の教育」の中で、自分たちの生活の中から問題を出していくという考えに基づいた教育方法を打ち立てた。このセミナーは彼の方法に依拠するところが多い。社会変革は、一人一人が主体となったグループによって進められねばならない。一人一人の主体づくりが問題となってくる。そのためには、各人が考え、問題を出し合っていくなければならない。

現代の社会にはいろいろな暴力があるが、人間を大切にしたい社会にしていかなければならない。心理的・経済的・物理的暴力に対し、非暴力とはあくまで人間尊重の立場をとり、自分と同じように他人をも尊重し、人間の生命を大事と考えるものである。

非暴力という耳慣れない日本語に、違和感を抱きながら、実践的訓練へと進んでいく。

は団地がある。団地の隣接地に空地があり、一部に引き揚げ者がスラム化して住んでいる。商店街の一角に派出所があり、その近くに自衛隊員募集のビラが貼ってある官庁の建物がある。

町長は引き揚げ者住宅を取り払い、空地にリクレーションセンターを作る構想を持ち、計画は着々と進んでおり、商店街もそれに賛成している。非暴力コミュニケーションは借家で共同生活を営みながら、基地反対運動を続け、空地で集会を開いたりしている。団地でも基地撤去の声が上がってきている。

米軍・自衛隊・派出所・団地・商店・町長・大家・引き揚げ者・非暴力コミュニケーションの役にわかれ、ゲームがはじめられる。

非暴力コミュニケーションは空地問題を絞って「リクレーションセンター反対。緑地公園を」のローラーゲームを掲げる。ところが回りかろうさんくさい目で見られ、大家からは立ちのきを迫られたり、警察から不当の圧力をかけられたりするが、空地問題について同じように考える団地自治会の人と話し合いを持つうちに、共に町長に対して行動を起すようになる。ところが町長は反対の声を無視して計画を進め、引き揚げ者住宅の強制取りこわし

非暴力実践行動の訓練の方法には「ロール・プレイ」「状況分析」「機敏判断訓練」「戦略ゲーム」「街頭演説」「ゲリラ劇場」等があるが、今回のセミナーでは「ロール・プレイ」と「戦略ゲーム」が取り上げられた。ロール・プレイは筋書を設定し、その中で役を演じることにより、状況分析と戦術感覚を発達させる訓練である。

設定された筋書は、相模原米軍基地ゲイト前に座り込んだ非暴力直接行動の人たちと機動隊とが睨み合っている。傍でやじ馬が見ており、その中にアジテーターがいてがなり立てている、というもの。キャストは非暴力直接行動の人たち、機動隊、やじ馬、アジテーター。討議の焦点は、非暴力直接行動の人たちが行動を貫きながら、やじ馬を自分たちの行動に引き込むかである。

役割が決められ、開始される。非暴力直接行動の人たちは座り込み、スクラムを組んで反戦歌を歌っている。機動隊は彼らに向かつて、ただちに座り込みを止めるよう説得している。アジテーターは非暴力直接行動を批判し、機動隊をもアジテーターに寄せていき様子を見ようが、一緒に行動しようとはしない。その

を決行する。住む家を失った引き揚げ者たちも反対運動に立ちあがり行動を共にする。

一方では、基地問題が拡大し、ベトナム向け輸送車が運ばれるという事件が発生するが、米軍はその事実はないという。非暴力コミュニケーションは米軍に対し抗議を行い、空地問題と合わせて集会を持つが、事態は変わらぬままゲームは終了する。

評価で、次から次へと状況が変化するなかで空地問題を絞りすぎたため、基地問題に対してはなにも行動が起こせなかったのではないかと指摘される。

ロール・プレイにしても戦略ゲームにしても、実際、身近に起きている問題を課題に選んできて、状況分析を行ないながら非暴力直接行動の戦術・戦略を練り上げていくのだが、ロール・プレイにおける非暴力直接行動の人たちと機動隊・やじ馬の演じ方にしても、戦略ゲームでの町長をはじめ権力者たちとの対応、また団地をはじめとする身近な市民との対応にしても、日々、運動を行なっていく中で常に起こっていることである。ゲームの中で生まれてきた戦術、戦略は誰かが考えられる範囲のものであり、実践されているもの、焼き直ししてしかなかった。それを越えるもの

が出てこなかったのは仕方ないことなのであろうか。

しかし、それらの戦術であれ、実践するとなるとたいへん難しいことである。団地の住民との話し合いの持っていく方、町長・警察・米軍など権力に対する抗議の方法など一つ一つ問題として取り上げるに足るほどのことである。何らかの方法でこれらの問題についても取り上げて欲しい。

また、非暴力を押し進めるとき、的確なる状況分析が要求されるが、それとともに、非暴力をおす人間の人間性がクローズアップされてくる。常に沈着で冷静でなければならぬ。そして、どんな相手であれ、同じ人間であると考えられるだけのものを持っていないければならない。

その人の持つ資質によるものが多いのかもしれないが、訓練によって少しでも得られるものであるならば訓練の持つ意義は大きいといえよう。今回のセミナーではそこまで突っ込むことはなかったが、ぜひその方向に持って行って欲しいと思う。

セミナー全体を通じて、トレーナー自身にもまだまだ未消化の部分が目立った。これは、トレーナーも受講者も共に、現在、非暴力直

接行動を実践するグループの担い手でないため、非暴力直接行動の目標・目的が明確でなかったためではないかと思う。そのためにも実践者たちと共にセミナーを開いていくことを勧めたい。そのなかから、単なる直輸入のセミナーを日本の非暴力直接行動の訓練セミナーへと発展させていけるのではないだろうか。

直輸入の印象を免れないゲーム名の適切な訳名、またはそのままの定着化を計ることも考えねばならないだろう。

ここでは詳しい説明が出来なかったが、リーダーとメンバーの信頼関係を作り、メンバー同志の親密感を増すのに有効な「エレファントゲーム」、また、ある一つのテーマに対し全員が意見を書き、それぞれについて短時間で自分の意見をまとめて述べる「フライリールゲーム」など、訓練は参加者全員が主体となって考え、行動するようになっていく。このことは、従来の理論偏重の、また、一部の人間に引きづられやすいセミナーのあり方に對し、有効かつ効果の高いものといえよう。そのためにも、ぜひ、この非暴力実践行動訓練セミナーが日本の土壌に根をおろすことを願ってやまない。

ミニニュース

第9回キブツ研修生 無事研修を終える



四月に出发した第九回キブツ研修生グループ（世話係 奥村久雄、中村一郎）は、一〇月の中旬に半年にわたる研修期間を終えて、現地解散した。

今回は総勢七四名に及ぶ、過去九回の派遣のうち最大のグループになったが、この半年のうちには、ロッド空港乱射事件、ミューンヘンテロ事件等、研修生の生活にも大きな影響を与えずにはおかなかった事件が発生した。

グループ解散後自由行動になり、約半数の人々がヨーロッパに出たり他のキブツに移動したりした。残りの人々は、来年の春頃までそのまま同じキブツに残る予定である。

なおこの十一月一四日には、第一〇回キブツ研修生（世話係、百瀬直彦）一五名がエールフランス機で出発する一方、第一一回研修生は十一月いっぱいには選考を終え、一二月の合宿にむかう予定である。